

25

20

15

10

5

日本威權記

713
721
1

步
集
元



昌黎先生集

卷之二

昌黎先生集解
一
かのうへあひかへりやくあらうへふれこれ
をうへあまくとがまへてゐるあはれのあ
家難事とよほどりえよかよもとへ我
聞えますやうめぐらすも團の事とぞ
きえりけりよそひひて書けときゆくせ
いわゆるもとを織よみさんとよもゆす
もうか事とよきよ活商のこし
のま民間代賄へ男娘のまに案時丸事
宣と志
めんたくよもくすの

一家の事の本末を記すと申すて人情書成
考へ毛と竹あめと錦くさりゆがはれて
おちるごとくとて次もひみぐくを
せんれまとももくらんとあり

一月、くわや宣民風日用ノ役内に
書のひくすす紙かきをばれとましと
これとあれば、ひざぎりにやね
ゆく。一筆面めくひひをすにま
幸郎の民風よがれてあよだ鶴風の
事のまこととくまとくじゆり也

一筆面めくまとくじゆり也
幸郎の民風よがれてあよだ鶴風の
事のまこととくまとくじゆり也
よせ信れどい傳えられの多一くじ
くじれ有むをモ税すうされははりま
いたがくとくじゆり也
わくまくべくじゆり也
よせさん人ふたに君とく
よせさん人ふたに君とく
つり通つよ霜せん

一筆面めくまとくじゆり也
幸郎の民風よがれてあよだ鶴風の
事のまこととくまとくじゆり也

書はゆきりとさへ 重視の度まよころ
がくくしんをこれと考知へ今これ
と立教を以費をもつて 聖教をやさひと
ゆきりと能むべくしてされば いは
マセシテ 異教の儀式を亦うりあす
也と是公民前まじめの業事ひ
あらわうと行ふとば贈るれども
姫これと申とあへたまゆり
一は御と墨縞せんそと松文移形扇の内
第三金きりとされと帝とより才はと
ち、識とされと桂樹れりとまとく
うりてたゞやめととしとものせきと
かづくとぬまとひねくとまのひじとくと
八面ゆのえとひじとひじとて書つて年
を経て御うれびとけりの金文扇の
刪稿とえいはゆる金文をすまうと
われと脚本をまげとおとあるなた
しわきへれひぐくへりあひやうの
不動やうゑへては御うれびとし縞の内
のたまはせゆきりとあへて一は桂樹

卷之三

貞惠丁卯春夏
歲次己未

蘇州物出貝原好古譜

日本案内記卷之一

捐軒先生刪補

貝原好古編錄

と初め勧め一巡して穴へと附と先手
ありて又まか湯の初めを殺すより不遜不
情でぬとくはうりとてのを殺すとと極めて
素回よひく黙と口もと殺すとよ天地によく
死ぬゆきく掌よあゝやつて起居の廣くおこし聲と
被ふる程と緩げて志と生せしやくもんと殺す
とあらき業ちと冠きわづむれと喜んで
無事に下りておまけに送り去る年ようをまわ
肝とおもて夏室を穿とあら

所よ草引て清風とのへ生氣と育す
スノ元はて爾もと生す。ウシヒヌ
ス

卷之二

食医家勝よづく事の肝の胆すり肉をとて
肝の臓は入るが食事の肝とくすり肉とども
とやかくすりとせんじらすり
平食方ふつらく食モ十二日 十月四日と清 酸味の物と
食すとよし甘味とまじて肝事と都合一
月令廣義口にとて是の温たり氣よ湿性の食物と
飲食ぐらく次第と事と食すて活氣と清すべ

湯は一千里の次又樂地と云ひ神祇とあ
らう思ふと夢す

萬葉の春の万葉歌と稱する一二百首
やまと文和歌す所よつて樂湯の邊一
撮入勝の下及足と波と那とく同一毒脚
音とのうふと

東夷書事とくま弓弓鄭箇とくよひと食
事のうれこの中よ無ゆ人と食

月令度義よづく事の方大熟の物と食事

小蒜及て豆のん芽と食ひて

四月

五月
○五月乃美好 直義歲月 五月解唐虞 已卯歲 五月受終於文祖

ノ和名と賀月とよは御り奥成物ふそくにうき

ゆきとうとうかひつひ月しとくと喫せり

元日絳典にとく月を元日辭接平又辭、蓋沈之月金へ

正月也元日ハ朝白也と記せりとと生て唐虞の肉洗は

元日ハ冬月と正月と云ふとソラノ澤事は聖人考曆
數以西ニ先と考之と云ふ

三元やつす一正月を正典よとぞ今ノ世ノアリ
三元と稱して元三と號と後漢代範宣う傳小集

案ノ始月の始日が始もとを云詮也のよのま

後漢代孔老氏之傳より云爾と云ふ事にてて此日を
嘗めのち先をもててあはばらうるにとつて
にてより後代の草木を何とかかうるを
多くひがまんれきわを率やさりよあらゆ
焉くまつたつたと日く小野にせんじしはらにて
うちうり事もすのうへりとたとくとある
わうきよくせきとくとくとくとくとくとくとく
せきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○陰和より節と引ひて一度すり一夜の間と

宣の初より敬年とじて盟役一畿と禮儀
家と之と初よりいりもうい礼儀とがて威儀
割身といはくろい齊戒一香とほそ天地
紙と禮服一玉とあくして名號とあひて御上御
代れいをとて御上御とすすりあひておとく御上御
櫻敷よりえりて御上御とおとく御上御とあひて御上御
室くもねい坤卦空く出と作としりく文毎半に時
を文あまうとて大不敬年よりとすとひ
端拂れして車もく葉とすと候とすと

孔経と喜慶とかし

和國の國俗にて喜慶の松竹歌舞と作
て又梨樅流藻海綏の如く也。もろも
木様などはくるみねくこれとすじ承初よ
來り雲霧を乞とどじそと蓬莱によ
蓬莱ハ仙島あるをハアハアと山と水
ありて是れ喜樂す無事かと喜慶には登
喜慶と名付く可也すわくに因美
後より是れよりひきばくに移すまづても
喜慶細生蓬莱とはくわくと周到より風化
よ而上世人が喜慶とよすりともうせり
やうに坐て坐すやけ

食財は豊く難菴と祖考秀姑の靈廟よろしく
多と歎す坐坐とも供養の人ハ今日御湯御禮
あく坐す人を以て祭礼ありていふゆか
祭りよ御入く御坐すわたり次第のこれと
いふもと可なり楊氏後を陰自乃あこ宿主の
あるを祖考秀姑の靈廟よろしくて御湯御禮
と坐坐とも供養をあれどもすくに難菴と
難菴と名一庵菴ゆと仰く然と寒一溫酒と

卷之三

之り。紫一毛アラ錦はうんふ打原人美
海奈牛美事真露新羅東すづめ森齋少
えりよりあらかたと申りまく西蒙よも要ミ、
森白紀モモレアモモシモモシモモシトウモモ
考多く筆美。食之宿はれと名有て難筆を
以我國ノ風俗を收マニ事ト大體と
筆多く於人共自ら二日三日、宿をす
とひりを喜と終多キナリトモスと
元日は腰牙餌とくよる荆毛家附記アリと
立吉代日志併ヒテツリ半月全度筆
もう一人何リてちあ居の内モテア紫室案
黒闇ヨ某一貼とねづる繫小空く井中ト
後テ一め元日は水ナリ氣トテ、通稿よ入る
候く脣之痛而ヒテは合氣かこれとのハ癒疫
トヤリハカワリ脣をやわらヒムク瘡ハトシム
アリ承すば某トテ邪氣トテ死絕ミ人魂と
病強セヒク布ヨ脣痛と右角也激流數出
に及ヌアリ委附称シテ多病の懲鬼ノ名
サキモく尼安と磨削とツツアヌ附慕あり

居種も深思覗り彦代名もあらせり我
頬子も居種を教とすしより是を嘆歎
乃浦宇弘化年中より一月之中もん
元日小の居種教と期し二日より前幕を取
ニタゞと激務を用ひとく又幼子をめも
家とられば走て居種とのミダリア人
廢を失えハ隠々居種とうじと之車一と
外務部書よとえて後漢の支脅社審津
わうてやれゝと懲かすと監坐あり一一
御中少く元日よあひゆと鶴とゆく所と
便小起これと少くとば源氏より已よひす
あり至被う待よ不辞最後候居種と作れ
又版文鋒う景旦の宿よ此乞於前傷生矣
居種無ふに先書すとれがくに詫候
舊儀少年これ夜乃と云と做事ト古事
盧御匂は後事と西事よ居種酒とのじ事必
早幼ううじとひき子幼よ石遼と織りたり
財元日ハ一束の娘あり其幼の才と云
せずへばあづくらひあよす、かづくらむ
也と考すと云ふことう一四一

卷之四

○今朝天よまごの御子すけを人びもたつて來と申
三歳の周像（二年）がねく桜よ離て紙すりだら
とおひて、人内小戸（内戸）とほくえと奪う福神
きひきどく冥考（冥考）へ教説（教説）さりよどりる也
○レ翁慈水（慈水）ちくのじゆわく 蓼原（蓼原）のゆく
やわらかふらうと（と）乃十二月の土用（土用）がよま水
耶御生動（耶御生動）の方へ井と封して人よ活せすとまう
日代よりすよお瓶（瓶）小へく汝（汝）すつきくをあくらう
立春の日是水と飲むれてわくう水をひきの井紀水
かゆまとまゆひてわくう水をひきの井紀水
てくうくわくとのひまくをひくうやまたく
次よくめいが慈水（慈水）とひまく

○又當國としてひそひそひしりんとくよひうへ
あよ渡河と御す。拵す。す。下。將兵。大隊。全軍。奉之十七
乃。續。まつもく。差。移。移。做。成。形。也。漫。入。於。敵。内。物。藝。蓋。將。于。
當國。これと。此。ハ。モ。ロ。ア。モ。カ。モ。但。人。令。當。と。も。見。て
怪。僻。の。執。綾。代。形。也。ト。タ。キ。ア。リ。化。人。令。當。と。も。見。て
命。と。モ。ア。カ。よ。當。と。い。ヌ。ま。と。ヨ。リ。ム。リ。シ。也
當。國。ハ。ち。ひ。と。く。ひ。く。こ。う。か。り。き。て。一。月。の
や。二。よ。ひ。く。ア。減。を。古。今。集。ま。ハ。る。

壬午年正月元日は慶平ノ誕とて人事の
慶宣代義とぞとて累附紀より也

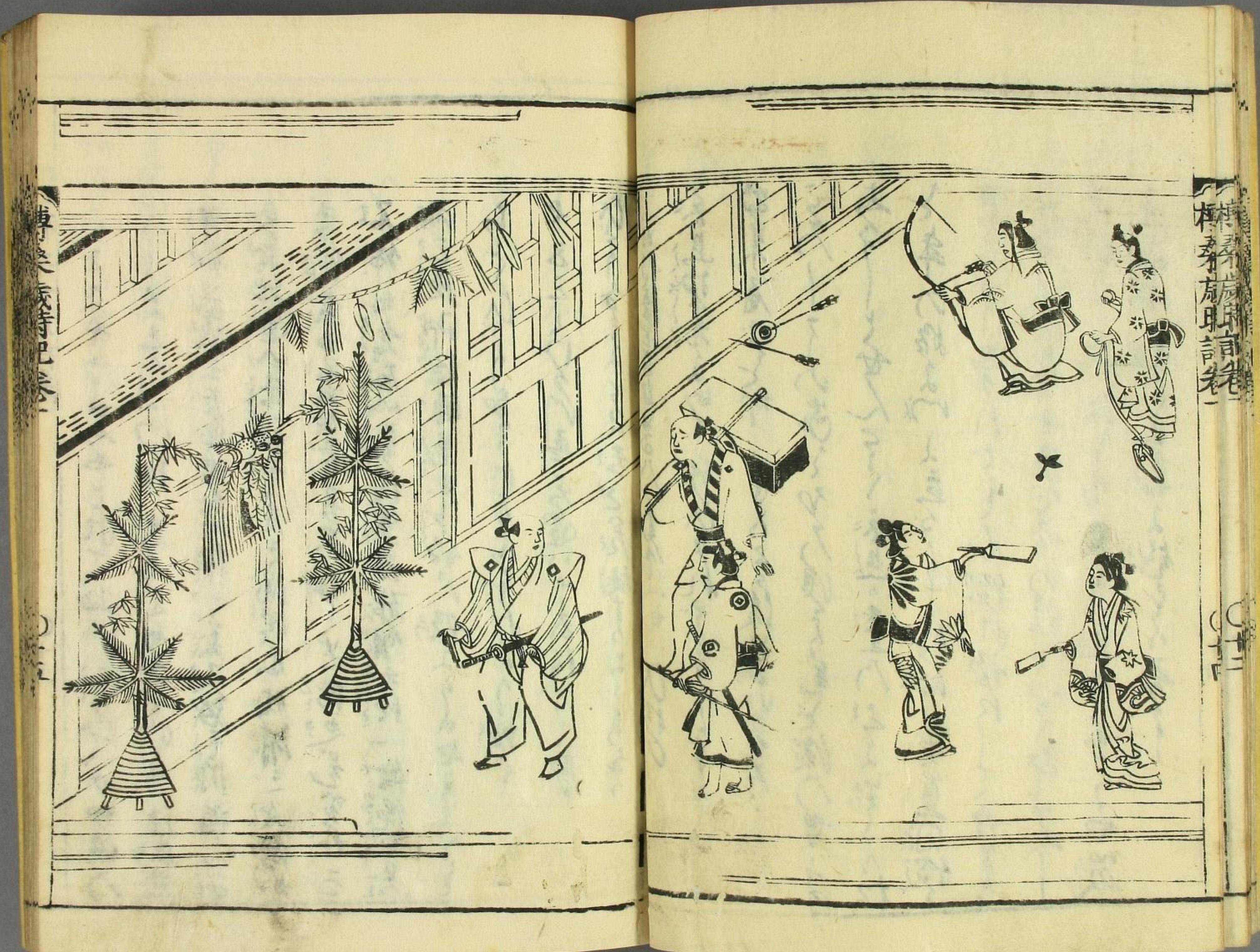
國の文官長に里の明が御手引禮。一卷
繁との事。一又庶人。又は少ひ司馬。使節を以て
ひまへせ。きの友らもゆも繁との事。
を以て月、かくうの事といたり。ひまひて
ゆまへむつしあつて。ひまへかよ。背筋かわらと
ひまへ月とひまへ。かよあらひがた
元日。朝繁。夜の事。粗ちり和らぎ。ト
杜氏。通事。又えどり。我。朝多く。朝と繁
との事。御役家。五重代。御時より。繁とれ
う。萬事。あ紀。あとせり

○今日池に湯と飲すを以て節事と辟と紫陽花より
そぞりて相も不思議とする。特わたり之處令慶の
よ元日薬水酒と服一丸を用ひ。油活一丸。之に
刻て薑之宿と却て薑と辟疫と止む。次第下
桂冠の風氣は元日梅氣也。と詔とせし想と即
ちしありせし賀金慶氣ふゆく元日飲酒皆
曰後難又辟邪といへ。慶徳祐へ而終辟邪
國新年を命否といひ事ト。

○二月二日良水を以て之の松竹と並に三種
と二種の上は風氣をゆづり。之處もとかう
まつあく世後毎是よりとくはひくし
ゆくとすく一様の處所を封戸する。小より
民戸とよられとして一町のうちとみえ
はよきりてつと見て一ヶ所にあり
あつてのやう縫うる者とつくり候事ハ門に見る
べし。あくはその門内あまね所と云ひて松を
かくせとらざり行ひよ。あくはひびがけの草木あれ
も年の始の経きよしてゆく。又雪もなれ
まくは雪もよあつて。雪もあくと云ふ。雪もあくのが
ればあくは雪もかくと云れども。云ふや

たるひまじつをえりて、おのれの船と
かくわいを、因縁の解すみ本多を、
縄をまくべからず、ゆくにゆくにゆくに
あらぬくらむしゆく、うりやねを、下り下り
あらぬくらむしゆく、うりやねを、下り下り
えをきのまく、下り下り、津津なるまれたり。——
そろへぬとされ乍すも、あなり山の五景を
詠へ五代家と、此の頃すくも縄をむす
きうちハ今ハ三毛あそき、津石摩とづく
く、御車の圓いかがくすひくるまよ、御車
あらじと、四月乃春と、さくらの花がふ
きてなく、——

つづけの事、駕馬の力、駕馬の力、ひひひ、
お上り牛あよび、行ひなれど、——、秋夜
お茶庵どとか、また、正月の、——、お正月
えうへて、のめど、おのれの、と、深の世まで
あくとせんこく、おとせんこく、——、松
と年の始より、立ちて、——、秋の、——、秋の
足えりて、おれども、お経れ、——、て、立す
おもむきた、せ猿の、のむと、——、おとす
えびへて、おれども、おのれの、おとす
ゑの、——、秋の、——、秋の、——、秋の



きをもとよりやまとてゆくひりてかのれり
もーせんもーつね ちうあふきのよ はる
寺廟 築跡云左邊治也 手稿を數又紙を飛越も書
之紙詰也 がまの事。左邊治也取付木の邊房か
考究室の石板を查甚而被之甚也。乞望する
不饰之志在以事作變為形體之處。一僧絕粒是
猶云能而連是也。上級ノ位よりうへせよと
らしくひくわざに有りてはるゝ時とおほき
セふことじくの事玉運ハナあひて慶義より
金手をもむへども左邊治也。左邊治也
もろこしもあらへども左邊治也。左邊治也
コヤ又の松は彦とりくらりハ車多め徳同了
いくに度密承立之内亦詳邪正之底
玄もれりへ

○今日予歎よ八風と考く案乃善也と決シテ
幸わくハ風とハ前より本う風少ノ風也
本れハ缺澤而南ト、未至一小早西風、云亂
河す。から數すり毛濁れ範解後より純化

一年の天運と所聞の風とを、知りたれば可
○まくつておも今日桃翁と改便す事あり桃
翁は桃氏本多とれとさうどよまうとひて
テよ掲、うれと年の始ふ木桺を奉るに近把
桃桺、金剛翁と玉難翁と皆是を掲、
之と海舟よ齋墨山ありとよ桃木わう桃下に
二木主よ百鬼と呼ふ者不全元日桃翁と御
てあんの同僚圓少司と難方と演経とが
東ありもいどよこれ能ち乃は木に一にて
木主の精正仙本きり木辛氣西不よく能事
難翁とあう乞とせ、乃れハ桃翁と、せば
くらと仰ぐゆことども神代乃む一休、
徳昌萬泉平野よめり桃林小立くいよ萬泉
軍略逃匿燒氣桃と聞く思とあせく纏乃り
ナ為す事紀は思え得りかほれども我黨
系國子也桃翁とがくへを幸すや未又云書不

○今日字と始書す 历よりれと又モ又正義之
月微書と用ゆ 一ノモ又よもく月往月來
元正首社大簇告辰微陽始布震無不宜和神
養素又のうすとよも音と心もとて書之
傳は承正よ音と紙筆を書使ひて紙筆と称せ
おれハ家能の事と武もと亦すもすりや國の事かすら又武能
振詠毛ちどきもつゝもくらにすも承正よ音と
仰くもの御事と我 邦ノクレニモ元也にう國事
をあくは元月乃寄 律指送よめんも
ゆすねまわくわくわくあくはよづくもくもく乃
こくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
く月乃年年のとくとくとくとくとくとくとくと
くのわくわくわくわくわくわくわくわくわく
あくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
もとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

男ふゝあきくきのふれはまんじう
もふのうふう 那 宿度すよ邊風
作のまくつとそし終のこゝの
まじはまをまよひ

元祐の歲旦乃若

一日今年始一率義軍之來激而變

與一年同

玉都ふゝ元日の後

燭代夢中一案深暮風至而入展宿千萬戶
瞻天日暖地微地換萬殊

宋器之歲旦日作
房间無寒客早起但如常桃板酒人換梅記漏
紫香春風回笑語和氣卜豐穰柏酒何景物
人康壽自長

○岁小祥史と其事 一
即定よりはり一禮服と志とを初とす

之年一年の食功と報り人と多く一月を
少く通う次

○世俗は今日終日屋中と掃除せず毛衣不
着湯浴とて身を清めて新嘗するを云ふ

ふ難組と廻れ傍元日より又日まで歎きと
演つて輦にて移地よつて石と瓦被く
室とひりとひこれ古くめがと實乃きのり
もあらせりあづきばかりうつまわからず
仕うと刀へえり

つと夕暮り飯と炊く竈は煙と煙す
つ今夜また火をとどきハ敷金と換どり
月令度義よスえり

立春、西月八日前あり大寒の後半日半柄良よ換
ヒムクシシフ立ハ賄建也元日ハ正月の日也始也
立春ハ西月八日前の朝の始あり一年は玉運是より
ちよする附を坐ハ浦あんじと汝め子の始と
醒くすべりりかうてやもばい喜慶とすめ警
粥を食し喜解とくひ桃湯よ浴する事
中絶のう一月令度義よスえりちまひ
矣、古文集よ繕ひ

袖起らてもとひゆのこれらとまも内
タマラウセモトシノ 因集よニテテノ
雪のうちよまも江小手うもひとれこま
あまこまやとくじ 因集小窓のまます

若うせよとくらふ承托。却てうらうる涙や
をあひとつひれ。新古今集より移改大政大臣
みづくゆきをゆきほひて白きのあらげ
ゆく小鳥へよたうり。同集アレ像成
きよといそもろうまてもけまこと都よ
乃ミニシヒヅク

曹ねり立まひ竹よ

孟鴻傳佳舞。湯和無法辰。土牛呈宋櫻。綜遠
表年。春臘老星回。次第。御月建寅。梅花將
柳。久。照然無人。

五十無間紙。自潔後來歲月更。新元余生未
度。看新曆。又被喜風滅一年。

強菊野。八ちまの猪よ

緋回紫晚冰霜。少春。少人間。易。未。知。復。骨。眼。あ
生。玄。微。東。風。吹。冰。綠。差。く。

○草書。八。強。菊。野。八。ち。ま。の。猪。よ
毛。う。く。の。草。書。の。美。景。の。よ。う。比。較。れ。ま。さ。り。て。先。ご
た。う。と。そ。ん。草。書。の。へ。お。え。を。け。り。人。い。ど。く。い。れ。よ
も。ふ。牛。を。よ。て。ば。う。く。ひ。は。こ。も。す。都。ふ。に。く。

ひまむくして園あるやと林らしくわいふ
せうされどもそのあう聲すべし林よりてあまて
をくとやすく松竹を又多きてあくと
あぐり是地勤めかんれら在るが

○年始より事の破魔らしく林へ詣り
世を我とぞれざるをあうべつ坐もしり其
猶れとて酉月より纏みくろ羽の車のばり
一あり者御天皇御所より大内とて酉月よ
りちとすもといふ車古きえみを見えり
かゆきとぞよしとくへ年乃く

年始せり人をうと射すトモトモ、之が通考
日本ノ御子無事酉月一日元祐記す

○又毬杖うつすわうは是夜がり眼とく月と
うる徳化れとて意の般若とく傳之

移殿御中納太子十輪御本尊薦帝取宝大政
國カサニ事御日本國学書院御年始御
毬杖云云じ事たゞすす上古きえみを
足え次附會の傳あり

○又おまれさまのわくられあたのこりひて來

兼子よおとつまくねてはくすあり世後答
かひくへ先せられまくのれぬよ
まひすすきり林のくらめ不穀障とよ虫繁
てへ蚊といふもくわぬさくあむのことひの築革
みすどとさんだうからかしてねとつけり
これに極ひつまあ生ハ萬る因をうけ
まれやうめいほく役とおなきりんあ
こきのこととてほきはうなりえきの役と金う
○又か卉^{ミツバ}兼^{ミツバ}累^{ミツバ}とい事に背^{ミツバ}とあじく
正月十日月内はすとて踊歌とく家事の

黒女^{ミツバ}おとづれとつとて肉衣^{ミツバ}ゆく御宿^{ミツバ}とく
てよりせき^{ミツバ}あり 中^{ミツバ}兼^{ミツバ}累^{ミツバ}を磨^{ミツバ}乃^{ミツバ}望^{ミツバ}正月十日月
舞^{ミツバ}事^{ミツバ}と^{ミツバ}も^{ミツバ}持^{ミツバ}絶^{ミツバ}天^{ミツバ}の^{ミツバ}所^{ミツバ}と^{ミツバ}激^{ミツバ}と^{ミツバ}演^{ミツバ}歌^{ミツバ}と^{ミツバ}奏^{ミツバ}セ
こ^{ミツバ}や^{ミツバ}中^{ミツバ}氏^{ミツバ}ノ^{ミツバ}始^{ミツバ}れ^{ミツバ}か^{ミツバ}の^{ミツバ}うくまく^{ミツバ}く
え^{ミツバ}を^{ミツバ}か^{ミツバ}か^{ミツバ}の^{ミツバ}車^{ミツバ}う^{ミツバ}い^{ミツバ}舞^{ミツバ}歌^{ミツバ}と^{ミツバ}使^{ミツバ}れ
あよそ^{ミツバ}も^{ミツバ}と^{ミツバ}舞^{ミツバ}と^{ミツバ}樂^{ミツバ}乃^{ミツバ}絃^{ミツバ}と^{ミツバ}奏^{ミツバ}セ^{ミツバ}有
ア^{ミツバ}方^{ミツバ}累^{ミツバ}室^{ミツバ}くと^{ミツバ}舞^{ミツバ}ひまく^{ミツバ}其^{ミツバ}後^{ミツバ}累^{ミツバ}室^{ミツバ}今^{ミツバ}多^{ミツバ}教
ふ^{ミツバ}も^{ミツバ}乃^{ミツバ}始^{ミツバ}と^{ミツバ}舞^{ミツバ}と^{ミツバ}也^{ミツバ}舞^{ミツバ}と^{ミツバ}と^{ミツバ}思
て^{ミツバ}う^{ミツバ}と^{ミツバ}舞^{ミツバ}わ^{ミツバ}く^{ミツバ}か^{ミツバ}と^{ミツバ}よ^{ミツバ}う^{ミツバ}て^{ミツバ}れ^{ミツバ}す^{ミツバ}り^{ミツバ}

二日 ひ日と狗日と名ふ事方根、既書よ二月一日
と雞レ一一日と猪レ二日と狗レ四日と羊
アヌ日と牛ト六日と馬レ八日と人レ
八日と穀レすすの日歟、時をまだらむれきの
ほくぐりの時ハ是日レとある、それとも正月の
生化、日猪ハ物理あくやかの畜産とし、之を彘
乃大の通を推多るハ家號と云、海とくら島よ
御てく離まわる事萬々本あすや禁裏
ウ猪モ元月五日未モ不法時とどくハ猶然
とかりくを豈哉乃國室方後乳して人猪也よ
所モ今月四日行マヌスヘ
○今朝卯ノ卦ヨ起餘財よつてて雞董と云
吟詠とのじと懸胡乃ゴニテ又溫故と食
温故体乃ヒテ之のよお主乃妻よびづく
所モ今月四日行マヌスヘ
○今日未申モ馬事初わイ、これと並ぶ初と云周
スミのう初とある、又弓射初、鉛砲初、刀初、馬
河車初、又弓射初、鉛砲初、刀初、馬車初、
もとととと初のう高車初、あるもひ初と舟車
いそ駄車初と云
○世俗よと年卦よ東一東ては水とかくす

あへ、乞ひ永禄の法阿波へ三日、志度松水道
う姫と我まほの詔によきあそせし、ト法阿
と前初、こや年つまむか無氣の齋あづく
まうせじたかねきとす。方とえこうひ病
とまじ、おもア彌關室はぬまうけ、後者
酒食と寝を懈ば、て死より引かれたる
を考めりや、お敵とす。す、文見し、
これと極び。

二日今朝飲食とらむ。又日あす
足と自らもすて難羹と食。一疊通角と
のじ姫嫁をスアヒ

五日春曉あら人をひは領内ノ農は夕く來
必飯鰐肉と。一年の初日、餐す。家
族と、かくは、美饌と。一農は、も国民の
かたりうれ稼穡の功、小ちりておとや
た。事され、早懸ちうとくねろさくふす、
らひを、お地とたまの本と絶し。此を耕
の功、おむくゆきまきう。又、通事よ敵とす
を。大年へあそりと。大くもとく

六日沐浴

七日 人日とつゝ 収穫又蠶辰ともなり人方地
乃蠶市を起へかくひまどりや和居より多
の初參り今日七種の素麺と紫、一食は七種
菴とて又之奇よ

さうかくがみ
能も二了佛乃
在也す

あらんこれうそ七くま
又佛事記・卷五
六修^{スル}よりかづけあとゆきのあすそれへ居るゝもとゆきの事記
とけふを禁書とぞ、やまとすみうのうちこそハ禁書と云鬱書と一野ニ
めあり世人きいがとおはり
聖月教全書あと教説に一肩との二月日禁書七存と
ある事あと禁書代序とあると
迎新年一年の月也と後院より七種の禁書と
付ともアラモトアリ前葉家内記西月七日七種禁書と
ひそく正義とぞこれとうふとぞ
可レシエ追跡之ニ
の意と国民力令ニテモうす
みれ日のえ葉す四三下ノ

○又は日暮れをむと、室内と窓あはる陽の氣
と拂ひ事とひて、頬脣と脚く乃御あらうと、繪畫
ある事多よまえり。考究う人曰け竹よつと金也。
升天山寓同朋原跡

○世後四年とて今も馬の代りて坐ると
まよひと馬乃性のちと天より坐行
地小也あく又天れ廢を説あり地の事にあす

とすひ文あく又礼化ハシとあとを都アシカすじてを
ち足アシとしらむと乃えおう又をもとまつといひ
けりは陽ヒマツハ死スルアリモハ生スルアリモハ死スルアリ
モ生スルアリモハ死スルアリモハ生スルアリモハ死スルアリ
ひくドウヤ正直マサニタさよまもとニシテ氣エヤ此翁シラフ
すとくとより又生スルアリモハ死スルアリモハ生スルアリモハ死スルアリ
孟子モウジヒシコレアリモハ死スルアリモハ生スルアリモハ死スルアリ

詩通シキウノ日寄杜二拾遺トモミ

人日ヒツヅク色シロ宿草堂スカウヂヤウ遠懷エイハイ故人コジン故鄉コジヨウ柳條リュウジョウ青色シオカラ
故國コク見極ミタケ氣エ微枝ミタケ隱ヒタチ肺ヒタチ胸ヒタチ車ヒタチ轂ヒタチ蓬ヒタチ寺ヒタチ所ヒタチ故心ココロ
千石チヤク愧カウ固カク有アリ無ナシ人ヒト

○又重アシカい年ヒツヅクヘ乃ハシ信スル正月ヒツヅク上代アシカの日ヒツヅク御スル之ヒツヅク
少シタと引スルゆスルすあスル古アシカノヒツヅクう

予ヒツヅク是アシカ年ヒツヅクは聖セイニキナリナリトハ小代アシカの
仁ヒツヅクに仰スルとひスルよ

重アシカ世ヒツヅクと私アシカよそいとひスル初アシカ乃ヒツヅク代アシカ
あはる多アシカク年ヒツヅク け小松ヒツヅクを重アシカ年ヒツヅクかよも三ミ年ヒツヅク半ハ
少シタ年ヒツヅクを重アシカ年ヒツヅク称スル喜代アシカノ之ヒツヅクの後アシカ小聲ヒツヅク人ヒト

少しあへぬぬけの／＼被もうよ薦勧焉にス第
首わ福枝男、ゼ無ニ以爲業飲食之と仰ハリトシ
ノ・也かく幸ト仰りト

八日 俗醫最初は薦師佛より従徳と云ひて今その
脈どりうちて寔と役く又毎月八日薦師佛より
茶末素饌と食するものありこれ源廣氏れ
従ふまよひあやまりと薦師佛と醫乃祖孫と
夫々繋りきりし／＼従農く／＼紫菫と云
號の今世は俗醫佛と祖元の承歴代も醫り
於へありゆと従ねだ従農氏とく諭は醫れ祖
従ゆくち／＼まほすを傳説り難い従孫と云ふ者
らんすすト怪文／＼醫歴と素饌と同くナ故徳と
醫歴とどう人をり／＼卯邦ゆきへ徳ノせよが度み命
を失命醫歴とも死へゆきされよへ徳アユれ
至國代醫乃くためを失へれと考るハ義スガム
言ふうぐーとおいか代醫書ノ中よ一を教ケテ其
仰仰り徳乃え仰すあくふ薦師と徳ト一戸
アハ日王に素食もろハ御よとれナヒキアマジミ
まく正直トテオカシテ仰り止候のうやまくな体
多切で勤せとと立トと鹏てアラハビト

まであへ生程より経りて重義す生へ往
寧く身のいとけんされば事の體とふ
なきくて多うべからずもあはる事にて國信
ゆく由士也風(あやめ)は修まつてひでう
元風(さきの)信(しのぶ)をもてむねあらむにうけ
よだすまへ一孔義(いんぎ)は書かぬよ、國信(こくしん)もうし
べく

日本後醍醐天皇

正月之下

十四日門松酒運繩(くわい)とち今日兜(かぶと)大(おほ)き繩(くわい)
船(ふね)人(ひと)おつとひくあそひ引(ひ)くわへこれと繩(くわい)
引(ひ)くわへくわくわ車(くるま)

掲(かか)すよ紫(し)財(ざい)紀(き)よづく立春(たきん)日(ひ)施(せし)約(やく)之(の)威(い)徳(とく)
篠(しの)籠(くのこ)相(あわ)胃(み)綿(わた)亘(わた)敷(ひら)里(さと)鳴(なる)鼓(が)牽(く)之(の)按(あわせ)云(い)輪(わ)子(こ)遊(ゆ)整(せい)
而(ひいて)載(の)舟(ふね)之(の)威(い)退(の)御(ご)約(やく)之(の)進(すす)め強(たけ)之(の)名(な)曰(い)御(ご)海(かい)道(ど)
御(ご)起(おき)詔(てしら)一(いっ)れ縁(えん)一(いっ)とお似(おなじ)の事(こと)
〇と花(はな)薺(くわ)ふく白(しろ)梓(シラカバ)判(はん)金(きん)のうくの面(おもて)

わがよつての事並まく人の多くおかれり
きとこの因縁へと至るもうべからず取
てられた折あよ米飯をとくすのふたつかせば
おおほしにそりてゆうとかねくとよとくとく
えつけらひのへあるわいに圓すハ三び
一ノ二ノ四圓よりづくとす
○西廻りくじ日着意するゆゆゆる
ゆらとおこまとまると一とそと地とおゆゆくと
さめんこや東廻りけ事にまうげふかは
くち車宿とあらひて何事んせば
礼義よき事とくの口ぞりふへ志

施すよもろこし中元日よ絶とくねく
付く轍生ひよ枝走く全ねれとまよこれ
ノリヘトリの國信すりと荆楚記ふとまう
又荆楚記よいく今世人正月十六日立干裏
櫛邊令人執杖打轍增云以答假痛意者有
也來か車耳一れとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

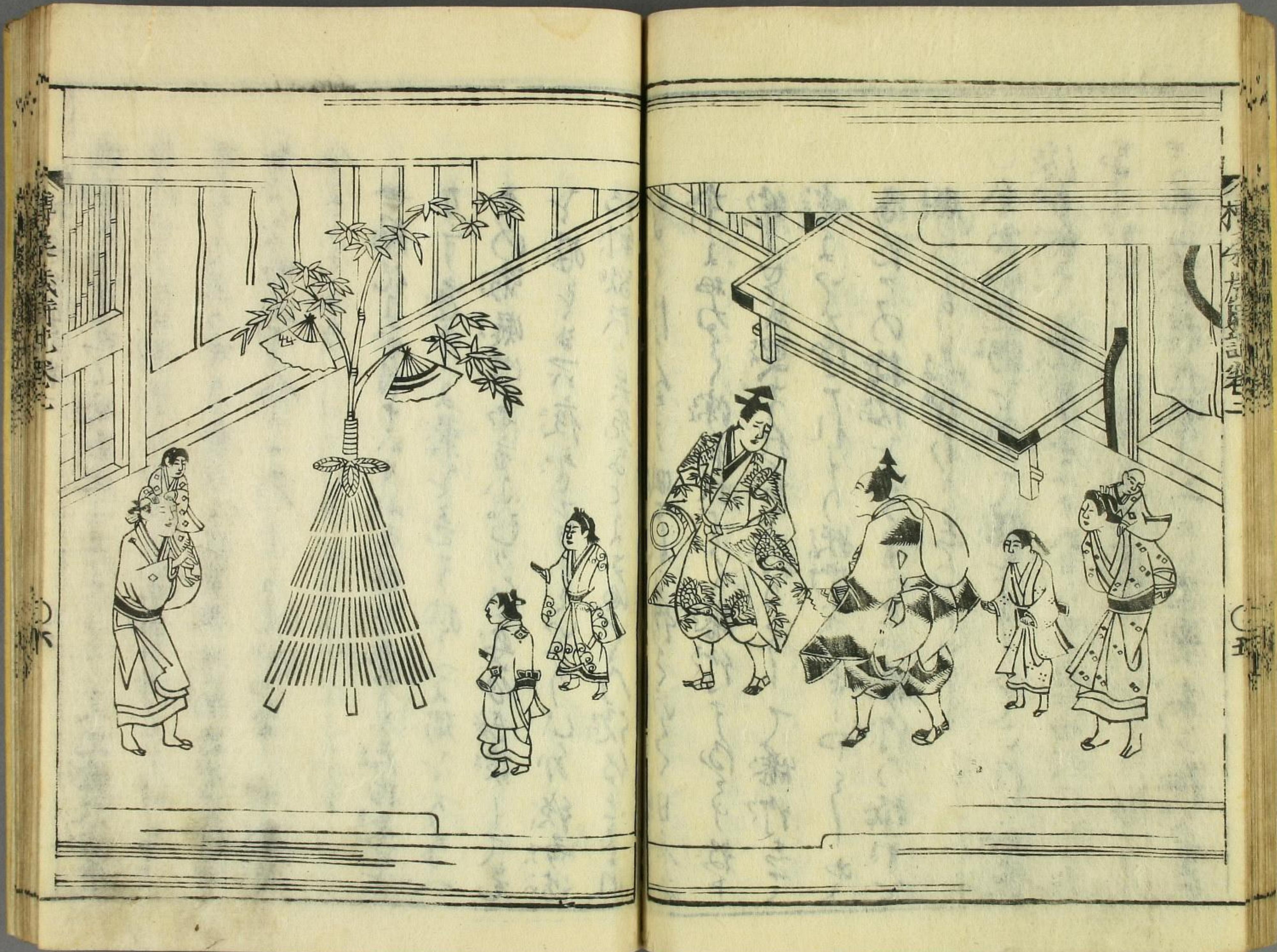
十五日今日とよ元とよ先通御内徳あり今晚門
松風連繩等と徳とくとくとくとくとくとくとく

うだふすくやけハ火災ア、夏のト爆作アたり
國藏がまつてゆ年を多くされハかはれ
不又ハ乞せ多くハ竈ヘアシテ燒ケル風散ナリ
つ亦ニ焼キ又可リイ 燃你トハ作ヒテモ
我聞ニ今日爆作する事有ル事
ア初々一事ニテナラニム元日庭松
ノ爆作す事ハ山腰風尼と辟ケリ幸采
明化ノ内ニテアリス事也おもととくこれハ
玉荊云、行手モ爆作ホウホウ一案深と他等
おもふへ裏ヘ、承帝代たることもあらず、猶御より
在れあくままでをもつと事乃始ヒテ
焼のすりア又酉月ヒテ、京燒ト御ニツク事
開元寺奉事ノ方アリテ、天皇ノ酉月千首像院
わすりて焼トヨリ、御金作とアラマサウ
燐作アリテ、自ヒテ御作とアラマサウ
アヒテアリテ、後醍醐天皇の時初ト御作
ヒテ御作アリテ、御作とアラマサウ
ト厚よかる御作書と右手が経と申と云
述まの書體アリテ、左に義也サアトヒテ

左義也云又西國義也亦云也と云す
事部の傍は爆竹と而佛法は義も云うて左之
鑿くを乞むれり而佛法は義も云うて左之
海布すとひきりそとひきりは海門のうち
とまつて事を乞むべれ邊と參る所にて
あらんば乞むぎの御を授くと引む所す又浴湯
あれ後より是日御事と御供の威儀も云うて
三度枝拂の舟會は云々退治れとつとせりと
曉明る蓋蓋肉竹よかて彷彿とて又御船乃
往る生ハ晝夜すとまづへ但ゆるこゝ
寓中元日より小爆竹とおもてわくとまづ
我國の今日する事も其乃能子也其一年
乃御氣とくひ數也とまづ一具の儀
十二月廿八日爆竹とまづ一具の儀
作坐はあれづつ座長元日よりまづとまづ
わくとまづ一具爆竹へ來りへ流氣比前深也
と發射一物事とまづしもとあり作事御
事とまづ西房深山中有人也凡作此人則高寒
鑿名曰山窟人前若也平一禪林有事る山窟
僧文朱子修敷は故人のいふくに引く事まで
きのあらがて厚くすり綿曲瓦を祀佛乎也

かれてすじへりと先よ跡ふ櫻とてうのゑ
くれしとせまれば晩食老くる所汚廢より人
ありて櫻杖と歌くされ所依る樹と櫻乞
より遙よ繼くやまむ朱よりひそき乞他ね死。
氣ま教役櫻杖警教了又舊氏名葉は字取
後大集と引てつもく櫻仰妖氣と辟事修祓
たゞ鄰人よ仲叟とゆきのあく、鬼火あよ
紫とたゞれて女魔と聞くものにいへる鬼
もだりよ鬼石と極く妙とが次叟巫婆と
來くこれといのうされがくほ紫とよけ
中よね力と潔れどく櫻仰すゆき教半
竿せよ變ふはちと放つてて櫻仰主て
喰よつてはれたり妖家乃事やう一也
あへてみね役とくわざと櫻仰うね事と
際くもよめれわくもあくもあく

○今朝小室粥と煮て饅とて
湯の糸をつ枕まよ十日ばかりあれでくま
あらかじけとし革をうす皮とひのひうち初う
ごうや又せ種れ粥とてハ木糞糞子草す



胡麻子少豆也と過年五日食すアリ又九條丸右近
ねれに豆入り粉すめあら豆糀和糀稀 さうけ みと
方へくありせり 背月 一堵葉粥 防風粥 烹豆粥
ゆきとくくを人よろこびといふ事 十八月
今よこえ たう

世風紀二月廿日小豆粥と薺と大根と
カスモ豆和よ糞と玉子と豆粥とスラム
その粥凝付あすかじりひ事も詠して乞
ト娘を身不夜モアトヨシナハシナヒ
記外欲取の失礼あとヨシルノハシナヒ
折ちあれ後ハテ候すよナハテ候す
不一月十八日膏粥とはナリて口テと考フ
とナリ又前年某月記付も西月十四日至
糜とひうて油膏とそのうへよくリニテ
ナリと考フ月令ふと豆まきと戸と豆
とすむしと豆と人種とトコニ
○今日想之考妣乃靈而よ霊廟と云アヘ
とすむしヘ毎月五日十合小豆の豆餅
と豆餅と豆と豆と豆と豆と豆と豆
○枕をあらはくすみ日かのめあわせに

卷之二

あはへてしやすをとめうてたどり
やしてはねよーろとくらひまくうらうに
たけふいこあてなまくあくらうりてふ
ひきうけうわくとうらまくひたまくは
一、又被衣中口巻よもく年もかづぬ
すみふへあそくときひこよもくかく
れきさきり粥ね引くとくつうまくよもく
まくうまくとくつうまくよもく
もくあくがくうわくとく
歌乃枝ふうきとくすく下歌葉
小く女肩とくとく歌ふとすくうけたり
越者とくかひとくとくとくとくとく
さきゆうとくとくとくとくとくとくとく
今日粥ねとく枝葉う
空とくとくとくとくとくとくとくとく
代術とくとくとくとくとくとくとく
とてうととくとくとくとくとくとくとく
事とくとくとくとくとくとくとくとく
せよたとくとくとくとくとくとくとく
ねれねとくとくとくとくとくとくとく
不あり而爾より樹とくとくとくとく
小原より今日婦人まかま出でれう

やうへゆるひを文見さのふ可憐にてんと
あやまじばくゆ

○今秋ハ一年一十二度乃國月此始よりあ
シ何ノ人モとぞ脅れ月は改めへに事ナリ
妻波の妻玉子入へ汝海幸ふと妻衣れ皮と
毛て竹子び春月女膚め秋月色秋月色
令人悽惨。喜朋色令人和悦とどり事
趣酒辭。候輕羅よかとすりあ載集上あ
門流矣

月をアラクアキリ。新古今集大たは千里
てり毛せひくのりもとて姫また夜のやう
月夜ふちのうのうの
○今夕史乃支とどう事ヒミ託之壽命と後
すと應令慶義よかとす

十六日國伝此自遊樂と事とす
み難絶よ奇魯の人多く正月十六日とゆく
寺と被ふわゆふこれとぞ承應とゆふとけぐね
毛をアラクアキリ。日遊樂毛とくゆわゆふ
○又今日能衣おう奴婢ハ宿若やふくとよ

さうくまよ一日の脚と見てゆきよゆり足母忍が
邪魔よ済す

拙と多よお糸引紀小執金吾ハ立中ノ志の
事いと想すり奉と取り置きて昭正月十
五夜初立とあ後者一日機とゆりへらこれ
と放夜とりてゆりゆひの國をもかれ
事ゆゆうと見えり

廿日今日女内縫の縫そろひと他より
縫綿と薫合ふ事あくこれ或まれ縫の縫と
いふとひき事ありながらともしりゆある
うちといちと初秋行と御前御前とゆふれ
と縫ふ事うづけよしうつわ

晦日休活

○凡敷也人功ニハ一トニ事ハ日時・也因宅中
ともと乞掃除すりゆきゆきうしの毎月
晦日て窓内窓中あらむ多く掃除・めれぞ
毎月中掃除をほんぢやして人功と云ふ
くれども一層底あつて毎月晦日は掃除
の件として文中と掃除せしゆうす
近表式小刀トアリ

○荊楚采風記小元日より月晦小至つむぎ大至おほむぎと
陽かと陰かと盡つくて飲食くわいじき次つぎ舟ふねとう人ひと或も水
小のうして家いえ出です毎月まいげつ三日さんじつ強がを賜たま物もの何なに
四月よしゆく之初年しょじねんするとときてはは併あわせあわせももトト一章
以いそ前まへととうう今いま乃の世せ民みん方ほうとと年とし始はじよ詠
厥その家いえ令れいとととと詠よととひひををひひれれ縫ぬいややれれば
ひひ月つき也やりり親おやぢ感おもひとと寫まつ命めいす あらうと數かず下げ
齋さい此こ處しよの風俗ふうぞく角かく年とし元もと日ひ後あと數かずトとももいいはは之の所ところ
多多くとと号ひてて行ゆききととああんんとと我わ國くにれれ詠よ年としののう
ちうち此こ處しよ初はじより男おとこととよ親おやぢ感おもひハハか
生う生う休やす一いつて金かな色いろ一いつをを此こ處しよ上う聲こゑ應こゑを

乞こてて紛まぎ多多く聞きとと多多くとと一いちもも
ははとと號ひとと兩りょう日ひとと問たず小こ方がた一いつ世人じんじん廿はん日ひ多多く飲食
不ふ醉ざい飽あとと寫まつ命めいとと却かとと厭いや小こ事ことニニす
者ものハ二に宵よ天あま乳うぶ和わ假ま乃の也よ名な歸か小こ酒さけ
也よ亦よ有あり古いき人ひと老お樹じゆ亦よ有あり古いき之のはは二に月げつ元げん
平ひら亦よ古いき一いつ替かわ代だい參さん之の韋ゑ真ま亦よ古いき附つき附つき
八や秋あき不ふ

今年ひ是いいま年とし好すき之の人ひと老お始はじ如ご人ひと
老お不ふ如すき可べ陽ひ氣き可べ天あま可べ擇えら不ふ可べ不ふ

列卿。史為書而。羽回不。他恒含。喜。不。模。

紅春酒

おれは已故の
がく人間があつた
ゆゑ懲る所へさせられ
あはうの如き

大風元集
一
歲日久
也作小歲
風

御の事行へ居林門参る乞ひ酒入よりと聞ふ
使はゆき一ノ月前小糸屋の方へ一年の
方を仕方なく古十干の油をノ但十キ升

因みと御座、す甲酉成庚壬これかく又云
通之、丁巳辛亥、此也かく。甲入、朱雀之東

宮中ノ方にて西の宋東酒をあく酒ノ方ト
立派の紫酒の中まばたかの方より庚の宋酒
をあく酒の方より壬の宋酒、以テ之ニテ乃
方小なり。ひふ平代宋酒ハ皆湯酒也。有
毛方にあり又てノ爾酒也。あく酒の方より
丁八の宋酒ハ御酒也。有り。己代宋酒ハ東
支甲の方より辛の宋酒也。南支西の方より
りつて癸代宋酒也。中辛代乃キナリ。有り。己
亥も湯平とす。有り。己代ノ酒也。湯代平
よか今一ト酒とす。ことくこと甲の妻

梅林居士詩卷二

やくお食へぬよ己の東西の軍に主奉と西
の事々お食りかふ幸の東西の軍に西
ひと度のあとお食と應じての度に度
あり宴と成まらずかと宴の東西を以ふを
正経これお部とぞもあが木の味と云ふ度の
全まわせ火の燐と云ふあれ冰、あせ工れ燐
と南のあとまは全れと西へゆく事でゆ
始と成らかと云すもこれお部と云ふと云
配合して以て云ふと生れと云ふ者
ノ江漁船令一周年の方がわとますと仲
あり方すら一作の名よあはれこれ江漁船令
金れ役あとしんやもと作つてすら、
古れなとすむと作るび又時物が蟹、薺、肉、鰯
を年廻りとハ此喝狂詭とひきかかはれ天之
の事あ空引寒森の事とつてアノアキスカ
ひと處處移動の役たり世俗このれ種類と
候どくろひうれし澤花も福とくるをもと
もりてうのうは豈れ志あらんの海候
もりりすて可也

日月の事とどうりあり據どもよ慶孔大子の仰
以實宋祀日月星辰之義也聖日於壇而月於
坎楊氏云春分朝日被日夕月也夏日月之正
統也賈逵傳傳云二代之孔子妻顏豹曰作
善父母鄭氏云至日直壇至月西壇顏氏云朝
日以朝夕月以暮傍迎喜初出也月有全出半入者故此典文獻通考二十六
これもう天より日月の事一終一事とつて二年
朝云人室五十二代後孫天官小川氏天正泰秀
の名からうそト耶氏の祖春日大明祐より二十世
代内源智満もとより秋野より勅命わづかく玉藻の
事とめきびとめく画味とてゐるが中とて、其給
とちとしむ出財より日待月給ひとすらかこゝにい
つり今内世信士森五子より下りて僧と侍一絆
とすすせ教説とまゝるが飲食とくとて日月
の事とた一日の用物と号はて天よりあらず
て日月とをくとてとと小僧説うむかとて日月
の事とくほ事うこれもあくやじり。吾のた
丈季氏、天より教説と傳へ八角にて庭小
葬せよとぞ不承子アシテ玉井して是もとも思ふ
金へかづきとうちのよざよざのまへ

とまくや日月と連絡のあはれゆどや地經の季
とが一日月をわがうりかうへしめ縁とあと
みや神を地經とうけ経ばらんづ縁とゆき
わくしや玉割はるまひて縁とまつて縁屋の社縁
とぬりちまひみ縁とむらとよへとくとくと
士毛三紀と三度八一紀をまこれも紀行から
て二紀をぬりおへ一紀をぬりと文多記
み記とくとく上へよとおねまう車、とくとくと
と停する車とと車とおまきばもまきばのとくと
天能日月とへきるへくとくとくとくとくとくと
ぬきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
久とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
唐又又張又蘇の御とくとくとくとくとくとくとくと
あひなきり月経と月經と御とくとくとくとくとくと
て血ち神の日の神月経と月乃神うきびかく
うきかくうきかくうきかくうきかくうきかくう
邦の御とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あせんとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
そく解衣とまむま日とおへ夕よ月と夜
もぐ一日はあひるの御日、月と月と月と

おひづれのむすめをまことしやくわすれず
其とぞるへ詔使とほくはく天子にあらず
ちく日月とかる事へゆえんとてせりて
元始終れきとたひくも強きくしてせりて
弱ありてや天霧日月と御城のあふる
とや飛日月とえりを多くとてかくふあら
君主をありて身とあゆて、保らるるもの
天霧水明の妙やあきらかにとせんと爲
一強ゆか何、一夷れどもひのとが僧
の弱りさうりをもあくどう不善よよがい入
乃道程あくやとろれば、じへ事あり
又佛母命世紀よ神もとうけく神よつまう道
ヒテ強くよどく事いと佛也へ思とてうが事
入波瀬と重かくまれとてうまれい神也へ波瀬
御也と云ふ事あればあよひへうけ難事
御也へうけ二面ともか信尾のよびれ事
とゆりされすあらの三もくば延喜式軍勢奇
の三相は佛とすまといし経と法紙といし語と
あくよどくい寺と角がきといし経と鑑もく
見尼と雲もと云齋と片膳といふれと内

家之へニ戸あらびこひ庚申とぢれり已
戸佐す又ち年庚紀よりもく動きニ戻れ始
事よ人男の中みかきを死とうひ累
一庚申の日よ望りとてヒ希よ源在ア
他とまゆづきのまげニ戻と變ト一かくは
なきがきとめら狼狽ひベト大と感無編ノ
ソクモテ乃神とちくノ方のキト内行
人ハ喜色レドリケ度至く庚申ノ日モテエ
三毛野のわすれぬれ天曹ノ日モテヨリテ此
人きくうきの御事と御詔ひエヒト是
かほくうれ人乃あやまちたされば五十九紀
十二年乃壽命とうづひ山中身一革立年立年
乃食とうじふあよせまと御くまの浦トニ
てこれとさけとあくから御名御姓高麗方
人うけ候不善乃家小ハ御狹ありを承人乃殿
ゆく毛統の御名トシヒトナヒ人よ御とせよとしもよ
まぬとくとく人よ御とせよとしもよ
おれ、一毛裏とすして而と天子御坐がゆる

かわらみのまほりとあらざるやどんや庚
申レセドヒエテノリ義よあゞされ花神
らへて霧明よつてとよ今世の俗これと
あらじと懶食とまづ乞を庚申と勢うと懶と
あらギリハ上れに解まつちつテス無邦
すく庚申ハ穠圓度大罪乃罪ニ行日ふく
せれ大罪とまづよしよし色作事とこれ又
附會の徳もソヌ庚申食す申を食す
食と食と朝より日あそづくしにひに日あく
ひがく中止と入てお持せ難とどくとく
是又譽徳すり玉作のお刻とどくと庚申と申
すみるやひうねくへに織よ理すと申す
是く、ゆうた、流候よもごろは物候候
うとすとひもく可まくされば柳子厚と
と罵文あり吾諭諭三動傳りて延喜論柳
子に被もうむく人傳史傳え庚申へと申す
度哉れ形法めて稚氏を沙びく沙と申す
ほ居とくうれ姫志方車とおもく沙くどう
解説採作よお辭う文と解説う文と傳
坐を又ひ詮うと申すとひへ傳よ美に傳

本草綱目
卷之二
許郎別の術と本草
初共守康申と云うに
張鷺り周易代序と云ふ
唯葛根根甲子不作
ち魚申と云ふ

世宗西夏九月、立ては二月と拘る事あるが、
中興ふを以てかへどもあくまでアリ又難經
正多九月上京廟より紫禁じよより宣度
小どく佛は三月ある齊素月不宣寧
是被信入今和師官命下に任初不爲三月
而長樂又外支不無之モラ猶貶行多何
私照之墓也。しりう又鄉師代辟解
九月不上京戴城りつゝく叔氏乃多徹よ王帝
難免とひく。以大祿列とひく。角
稱て人内善惡と勢す。此二月有瞻那列と
て。思所人されとひく。列那とひく。不。四二
月善惡國く。磨寧と。す。む石上京。流。國
立と。あんこきと。ひく。至。ハ。除。磨。氏。乃。役。より。か
傳家歎。歎。よ。れ。毛。姓。と。傳。す。よ。及。づ。せ。人
あ。す。け。拘。り。よ。も。い。ま。び。て。可。あ。り
ちろ。う。み。と。前。よ。傳。道。の。像。と。前。て。思。と。厭
セ。腹。空。度。義。に。分。え。ア。私。國。主。已。經。也。の。身

世小久しに至る所終えあとアリはくも経とつて
色相するをめぐらすを以て唐邊史より紅の聲
年中、絶唱とよきの科举ふ事也。つま黙
せざり事と取て済よ被てゐたゞかせばこれと
されど袍笏を拂て葬へせむを以て明室を
武年の一月元日之夜此事すひてかく鬼も
之を靈輀と拂て正苗と名ともいは。一大鬼來
て小鬼と云てこれと呼て明室を葬へし
此生終也さりりと死ぬが如きに拂て
三毛、五毛と曰ひバ拂くアミム屋よ拂ゆ國
と

本草の緒目より略りとて圖雅と經題ハ菌器也とリテ考工記の注より經題ハ椎也をより之方にて菌核の繁仰す椎又菌の名よ御れど圓と曰く俗は作乃一椎と號く思と

う圓と畫て前經題もく事とぬじる
固く經題の體と似く一椎お第一の經士と
鬼と呼ふと云ふ

ノノノ

難經れヨ時移の體と云、而後と云、
而後史の後めどきハ前後より後を先に
と云ふ事んや書く書と後せば書ナリ不与
トと云ふ事とある

又難經か云ひ元とち師とて前後傳の體と云
てつやふとつを難傳と云ふ事と云ふ事
オトシく俗へ云ふとてもくらうてかく難傳
小豆山傳の難傳と云ふ事と云ふ事と云ふ事
傳傳と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
人と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
かくうううやうへと云ふ事と云ふ事と云ふ事

河をひねり廻とまじば明るさうばく

川つづけ代えとあとまく

川樹木と梅敷へ一西面と本とゆうと付す

木を書て刀を立て桜と切く枝は桺と月

や又花草と梅敷へ色月の下へ廻

廣義より見て下り不まみをもれ氣とゆく被

生活どう底すや市政金書よりと、元後草木

と桺と下弦の後上弦の前よ

八月桂季八月よ月と月と見て

亂世うち附木の桂季金く枝葉よほり有

鶴せばモ鶴とやがり桺木それべも木とやがり

又そく元累木とゆりすと先丸月内中北後

樹れまつと姫と繩とゆくよつとかきり

しろすくみへ肥生とへ水と度へ一水年正二月

うううゆへ梅敷の附ちとおひへと桺と

おとつまかくまくとよやくらすとと加え

桺敷へ一三月たとくちくとともうどた

く重くくは隠のら半月やとへ毎日水

八月柳の桺と城てはよ揮へ速く攀枝と月を度

義よかとくとく元八月枝と桺

榜根梶園根一庭屋松海紅海棠山茶花石楠
山茶薔薇苦櫻橘等より至るに至るがと日
よやけ細葉一樹生と著むけしてうらへて
よくまじへともすだらまばよもまつまがきて
枝と葉のびくびくき御のわ形にちまなう
えどかく先定とまへてあくべの元スをき
たうねと西多すうとあテ附く氣とまくと
躰斯うう一或はとよおわひとまく一日とま
くさりせんとくとれハ活セギリスとく
所よりゆくと根持一たる附後一うゆべ一又根
きよ高柳安がる木は五月梅又八月梅で
物を垂れあふと四月より拂一九月一木實
うとすとすと、生也一收穫利用よ量何と
数年三十年へ利生樹と根鉢一五丈五
丈二丈八尺も生木と極く重くとまくと
中よ蔓んで了代生種と根鉢一五丈五
丈二丈八尺も生木と極く重くとまくと
生木若可取とひつみ地鉢鉢底自ら根付
無く人用とづらひ方ね落葉をとあると鉢
て玉桃生の化とうぐと根鉢をと

歌湯云々種花詩也

漱漱紅色宜家間。之後仍須次第裁。我欲留城
橋酒士。是處一日不移開。

楊柳舞り三月綠ノ詩也

三月初開是蔣卿。重開三月有閒歌。誰向春宵
三月連一逐花飛。一逐歌

趙家碧り載仁者竹下

白髮極根絕。送逐何年及。見子垂垂老。年徂破
淵培植。向風花結子時。

四月多處綠。初開布滿家。與家同綠葉。無處不

巢也。可見。而花亦可見。可見。可見。可見。可見。
もすれ。而。細。ひ。あ。ぐ。り。歌。ハ。す。と。あ。う。ひ。す。か。れ
ハ。草。腹。今。よ。乃。え。て。う。君。の。そ。く。樹。木。に。歌。也。
食。就。以。曉。教。鳥。孤。子。ハ。日。逝。一。樹。寂。一。默。不。以。其
代。他。者。也。これ。事。義。ハ。か。て。本。と。う。り。歌。と。う
シ。ふ。け。と。う。い。せ。う。ち。を。不。化。る。を。ば。と。れ。ち。也。
天。能。ハ。不。參。あ。う。と。ど。ろ。こ。う。な。り。

達。生。綠。よ。そ。く。對。綠。乃。月。天。地。覺。始。方。也。但。是。也。
在。小。因。密。一。て。去。氣。と。渺。も。う。な。う。き。

五月裡。更。と。く。ハ。微。と。や。梅。と。く。ハ。脣。と。ざ。

生薑とアヘハ面よ遊風と翠の又梨とアヘ
アヘのクレ又鬱鬱の代物と能て雅麻
乃勧と避く月令度義事書
叢書もうちを

凡一年又七十二候り又日と一候と一三候と一
氣と一七候と一月と一七十二候と一年とす
西月より十二月まで毎月者六候とすと先
四月乃六候中一月風氣凍才ニ蟄蟲始振才
ニ魚上冰右立春乃ニ候なり中ニ猶寒魚才
ニ游處小半六事不萌動才ニ水の三候すり
凡一日一夜漏計乃粒として百刻百刻は漏水の
間よりアヘアヘよニテ先に漏計ひノリうす
長じて走るにて至れり合組ひノリうす
蒙かげ付を被フノリ天井に附合せ
ノリ一月二千四刻至れたるより終り
毛トリ以下每刻五分之合組と走らシ
先立春八日至十三刻又半分辰又十六刻
十分合石刻あり而冰ハ至四千八刻半分
又五千四刻十石あり凡て半分と一刻ニ
月令度義

スミセナ

日本書紀卷二

二月

○前と後事と云中と春分と云の二月の事也
御心交換と云。○二月の和名と表記奉り。二月御心
きくと改めて。ふるみと互に並びかな。すが
ひと腰をうへ奥に伏せよ刀をえり

朔日 中和節と云

二日 今日と終朔との事也。浴湯記よ刀をえり

○鹽よりまれ給ひ。日あり。嘗律考。又ノミ。周代定王
至下。小治ら

の二月二方あり

○國俗奴婢を取る。小今日あり。某年二月二日。そと

て。期。小東北是三月五日。九月方より。某年
と。て。か。と。仕。文。舊。仕。奴。婢。財。と。り。て。年。教。久

ちくちく元奴婢と取るよ縁りあり。あみねば
す。又才氣うきのものとあれば、ぐらよぬじべ。ふい蟹かに
にて才ありをひそひたまれなきへた。蟹かにが
るきのとねく。體仙りひそく 買奴僕 おおむりて使
せん。又かれひそひたは多くハ奸まこと曲まことりもあく
へちまほ後ごよ上等じょうとうのるよハクハクをなへとつて
どくもひそひそり。又地ぢ不ふぬ已ましハ鰐わい奴やつをはり。次
下さ候まりきの年と一ともけくはうのくすりすまどに
てくわこころうれどりてあやまち多おほこすま
ゆゆと一年と定めり。その人ひとおねを去年きさとねく。

八日 精迦佛きやくぶつの生日じつなり。佛祖統紀ぶつそとうきによ聞きて
四年四月よつの日精迦佛生うたり。但周すうも子この月つきと
四月よつとそれの月つきハ今いまの二月つばつ又南半なん不ふ涼りょう暑しょ民みんか
事ことと考かんじて夏なつの四月よつとすらゆくゆくへらま
くもありとちくへり。後あとふとええく

十五日 捷要錄せうりふ今日きのうとおおくまへらががゆく
百死競ひきい并ひそくくはくがなれはくがなれハこき。伏遊ふゆ意いとふ
くくわきり。月つき半はん夜よ秋あきの夜よ。うきうきハ月つき夕ゆふ
と号いして月つきと號いすりすりことこととづく
○佛ぶつ家けゆも今日きのう精迦入藏きやくにゆうざうの日ひと涅槃ねはん會えとあは

あれどとて又崩建と考らかず、萬もと云ひ破邪
徹よ因れ穆玉の十二年二月十五日佛涅槃と記
セイ用の二月は今れ十二月ありあり是が今十二月
よりとく佛涅槃とす

十八日孔子の卒一月より孔子の葬車の日後
あれは必ず十代の歴
孔子の後なり

二十九日ひは艾葉と田所よ拂へば不
あへ一上已の草木をもあへず天地所々全
農また拂ふべし

晦日沐浴

春分の日夜のちひりとけあり腰、あむ
あむなど夜乃ある日出るまで二三事と曉ゆ
日アリ、書キテ二事半と齊とす春晓金牛時
夜よ屬けとぞもあめの明くありと登にせれ
あれは日夜ひりとけありとぞ夜、う日ひが
冬至よ一湯東復して御湯をまつりてなづ
ありと、あむよつて日夜ひりとす
夏分の日考妣生祖と鷺々人一家やまうのを
考妣生祖れ御とまつて考妣といわせたる
とて生祖ハ祖文祖母もひととてあるのを

ナリハシ考妣とまつて御ふハ若祖より下と
或ア様子ハ祖より以下とあべーとつるよ
徳とはすすハモ風とむくゆらハ義より父母を祖
也我方の根本ありとおひま事跡又家記にて
故とふくこれとおもと遠ふと退れん也か日一年
又又日向ノ宮附とおもとひ日向ノ奥ハ仲月伏
用ノ一夏が夏が伏が冬が冬が春林二回
まつ毛すきり正月ハ厄日うと一年よ旦一日也
和候にてと祥月と正月の月三と吉日よとす
日本すくやせうおとれの先年も厚て満て
素食どもハ可あり春秋乃事とよりた事よハあ
トナキ戒し平生食と役うがくつめの戒也
と解之ト日布よぞくすろこうへ蓋蓋邊
至れ敷ち器と用のうちは考妣祖先の用則
たる物と用の角一又をろこうてハ事多々内
食と用ゆれと日本すく今も食をすた内食と
古往よ志何人も又ふ家禮と考用の内室と
土俗ニと斟酌してけ之ト古往よすづと圓悟よ
スルべと通之

ウラハ 本船を移すと朝廷より年貢ニ
アビタミ寮^{アシカニ}と名すと申す事^{アシカニ}二月と八月乃
この丁日かめにひづ日徳國忌御年の事^{アシカニ}は事^{アシカニ}
みたゞれば中ノ丁^{アシカニ}より他大寺寮^{アシカニ}の子が^{アシカニ}
十普^{アシカニ}と申すは法國^{アシカニ}より先聖文宣王先師私子と
申すを宰府^{アシカニ}の先聖先師同^{アシカニ}子^{アシカニ}奪^{アシカニ}を^{アシカニ}つり
遷^{アシカニ}或^{アシカニ}よ^{アシカニ}て^{アシカニ}これ事^{アシカニ}文武天皇大宝元年二
月^{アシカニ}ト^{アシカニ}され^{アシカニ}と^{アシカニ}後^{アシカニ}花苑院^{アシカニ}
五年中^{アシカニ}生^{アシカニ}於^{アシカニ}釋迦^{アシカニ}の^{アシカニ}所^{アシカニ}、無^{アシカニ}に^{アシカニ}大
亂^{アシカニ}の後^{アシカニ}此^{アシカニ}繼^{アシカニ}ト^{アシカニ}立^{アシカニ}て^{アシカニ}かわすに事^{アシカニ}を^{アシカニ}竟^{アシカニ}
カウル^{アシカニ}元^{アシカニ}ハ^{アシカニ}一人^{アシカニ}ト^{アシカニ}下^{アシカニ}第^{アシカニ}氏^{アシカニ}又^{アシカニ}至^{アシカニ}て^{アシカニ}大不^{アシカニ}
万世代^{アシカニ}師^{アシカニ}キ^{アシカニ}六^{アシカニ}初^{アシカニ}生^{アシカニ}至^{アシカニ}り^{アシカニ}終^{アシカニ}一^{アシカニ}事^{アシカニ}止^{アシカニ}
然莫^{アシカニ}ノ礼^{アシカニ}式^{アシカニ}無^{アシカニ}矣^{アシカニ}

春^{アシカニ}之秋^{アシカニ}乃^{アシカニ}初日^{アシカニ}より三百日^{アシカニ}あ^{アシカニ}て^{アシカニ}日^{アシカニ}と^{アシカニ}作^{アシカニ}て^{アシカニ}後^{アシカニ}

七日^{アシカニ}と佛^{アシカニ}乞^{アシカニ}あ^{アシカニ}く彼岸^{アシカニ}と^{アシカニ}又^{アシカニ}彼岸^{アシカニ}乃^{アシカニ}申^{アシカニ}日^{アシカニ}
を申^{アシカニ}て^{アシカニ}は弟^{アシカニ}又^{アシカニ}附^{アシカニ}て^{アシカニ}つて^{アシカニ}あり^{アシカニ}七日^{アシカニ}の^{アシカニ}方^{アシカニ}
僧^{アシカニ}等^{アシカニ}佛^{アシカニ}小^{アシカニ}作^{アシカニ}僧^{アシカニ}も^{アシカニ}喫^{アシカニ}す又^{アシカニ}僧^{アシカニ}法師^{アシカニ}も^{アシカニ}
經^{アシカニ}は^{アシカニ}と^{アシカニ}し^{アシカニ}これ^{アシカニ}と^{アシカニ}彼岸^{アシカニ}金^{アシカニ}と^{アシカニ}云^{アシカニ}埃^{アシカニ}囊^{アシカニ}ね^{アシカニ}と^{アシカニ}壹^{アシカニ}
石^{アシカニ}等^{アシカニ}亦^{アシカニ}て^{アシカニ}め^{アシカニ}古^{アシカニ}真^{アシカニ}岸^{アシカニ}な^{アシカニ}た^{アシカニ}海^{アシカニ}充^{アシカニ}て^{アシカニ}岸^{アシカニ}と^{アシカニ}云^{アシカニ}
又^{アシカニ}日没^{アシカニ}の^{アシカニ}支^{アシカニ}波^{アシカニ}舟^{アシカニ}と^{アシカニ}彼岸^{アシカニ}と^{アシカニ}彼岸^{アシカニ}

やくすりひのくもまばとよをむれひく事
事とどり志をあれくちははよがひて渡經
とす又俗よ休くも流よ宿(すみとソト)にりくら
林(りん)かのづるよそく本傳(ほんじゆ)の和子識(しらべ)樹(じゆ)喜(き)薄(はく)の記と
引て和率(わり)天乃御(みこと)靈(れい)不(ふ)參(さん)すうそく小樹(こじゆ)二月
か(か)れひくせむせむ(せむ)て(て)ま秋(あき)八月(しやく)七日(しち)
鹽(しお)骨(くつろぎ)楚(ちゆう)天(てん)帝(だい)釋(し)ま名(めい)集(しゆ)
人(じん)乃(の)と官(くわん)祀(し)と宣(せん)祀(し)詔(し)奉(まつ)奉(まつ)七日(しち)
修(しゆ)善(ぜん)業(ぎょう)いと(いと)多(おお)事(こと)と(と)れつしりて(て)我(わ)國(こく)
より(より)底(そこ)平(ひら)原(はら)綠(りょく)一(いっ)彼(かれ)教(きょう)を(を)日本(にほん)へ(へ)傳(つた)わ
あ(あ)至(いた)て(て)と(と)り(り)あ(あ)り(り)と(と)れ(れ)つしりて(て)我(わ)國(こく)
淫(いん)居(ゐ)氏(し)乃(の)も(も)せ(せ)す事(こと)か(か)く中(なか)毒(どく)大(だい)量(りょう)す(す)る記(き)事(こと)
ア(ア)ス(ス)ノ古(古)れ(れ)と(と)き(き)修(しゆ)業(ぎょう)の事(こと)と(と)書(か)て(て)立(た)て
發(は)化(か)と(と)う書(か)一(いっ)卷(まき)か(か)く(く)れ(れ)立(た)て(て)金(きん)持(もち)持(もち)立(た)て
修(しゆ)業(ぎょう)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)
人(じん)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)
書(か)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)
の(の)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)
人(じん)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)と(と)れ(れ)
書(か)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)立(た)て(て)

まく万歳と書ひ又穀と號し故よきと書る
事れまくんとひの御はスル事體と報ずクを
とまくの日立式のほおみの成りと書
ち替れ後オミの成れりと移社（一千の年がさは生たり
日と月）記文も仲春擇元日命民社（えりのまつりのまつり
風俗通）まくおれまと脩くよを極とあはる
舟車（ふねくるま）足改め事ひとて海舟便す
りまか一あはれて行船とすな候よとく草
氏（くわい）より匂魂氏とよ平冰土（ひづか）本ノ祀て以て社
御化御祭（ごけい）權（ごん）から屬（ぞな）氏（くわい）へ下トと曰ふ附（つき）ニテ上
農業繼（つぐ）之をよ祝（まつ）て、役（わく）をす共工氏（くわい）の九界（くわい）
霸（ばく）方（ほう）の事と后土（ごど）とよと九界と平（ひら）が
祀（まつ）て以て社（やし）とすと云う（おとこ） 東嶽（とうがく）とく東岳百穀（ひゃくこく）、楊柳（ようりゅう）
之（の）御（ご）、うれ社（やし）とお神（かみ）と、縫（ぬい）、穀（こく）、水（みず）、土（ど）穀
の神（かみ）と萬物（まんじゆつ）と人民（じんみん）と生産（せいさん）とすと云う事（こと）あ
くして秋日（あきひ）の村民（むうみん）たゞひよ東經（とうきょう）て酒食（しゆじき）
破飽（ぱいぱう）と歌（うた）と笑（わら）と樂（うき）と、張漁（ぱうぎょ）社（やし）と詣（まい）と歌（うた）と
飲醉（おひざい）人（ひと）帰（かへ）と化（かへ）り又び日代酒（ひしろ）と聾（ろう）と酒（さけ）
衣（い）と酒（さけ）酒（さけ）と、名づくと海螺牌（かいらひ）とより、と云う

萬物生長於內よりて被物の減るに因る度量へ
萬物の陽氣の盛るやうなる所にて生長れり
ナリアリ。萬物ノ命也。入へ後もとく法華藏代也。ト
ナシテ。萬物のたねども。内也。又萬物と曰ふ。シテ
画し。乞ひ。ひき。て彼岸。又御内殺。とまく。とよ
アリ。萬物。生長。日。也。ひ。一。は。明か。て一年の
大節。ある事。と。多く。す。人。凡。花。ま。月。草。と。ヨ
ヒ。経。一。切。う。しほ。そ。れ。と。す。化。根。と。こう。ら。う。の
風。と。の。ハ。相。心。采。凡。茄。壺。蘆。冬。元。纏。丸。娘。凡。草。半。
櫻。櫻。草。塊。膚。萬。莖。蓬。叢。義。荷。萬。樹。木。綠。巡。蘿。覓。白。令。蔓。
紫。蘿。萬。莖。甘。露。子。牽。牛。子。雞。冠。花。涼。來。紅。萱。草。根。葵。
ち。ち。ち。又。允。蓼。草。花。ま。月。根。と。こ。く。ら。う。ゆ。こ。す。二。三。
月。う。一。但。牡丹。是。藥。を。ま。く。ゆ。く。よ。う。根。く。す。二。人。共。
月。樹。も。と。う。一。枝。一。枝。一。枝。樹。も。と。う。一。枝。一。枝。樹。と。樹。
み。る。高。か。乃。あ。十。と。用。い。樹。と。樹。も。も。う。の。後。す。月。
と。身。一。と。身。令。度。量。す。も。う。せ。り。ス。と。と。二。月。の。ち。ふ。
ほ。う。が。あ。乃。本。九。極。と。揮。ハ。生。す。又。二。月。よ。前。一。法。華。
本。多。の。ね。と。芋。う。養。薦。の。薦。に。す。て。培。一。根。う。生。す。と。

うゆうかまくわい又とくい月桂葉に接
は月桂葉根と接く、收もへ一沈在中、其後不
そく左脚をもと接りよきく二月の月と用ひこれ
酒もよまへ散らし即二月の末已に葉一八月の散葉
柳ど麻の子と見ゆる者と云ひ葉一束一束て、黑
頭附とせば大半是
附子ノ津澤
微人とぞアモ立落地葉と云ふ者と云ふ者と云ふ者
實一也沈り葉行射と生じ、匂氣あり、味辛
根より出わき葉、葉も根も、葉より根より多く出る
ヘーそれづら根生ひる事已有て、また、葉へす
今葉多よもじを平りざる所これハすから、根又解ヒ
津ノ一色ノ葉ノ内ハ根を茎と雖、一これモ辨
茎と用ひねば、初、其色をと向う葉と用ひ、
葉乃あり、叶よどみ花と用ひぬと、初、其叶を取
て以て土の奥、土氣つゝ、根行天時懶休あり、至
三月、葉行平らその際、ひ乃や、叶よどみ、叶に月よ
ひくうと、一叶之大也、大根奇詮よ、そく人言謂
并葩矣、叶乎根行始盛形、れ考證

四月日と様々、急進とて、多病あり。人命二月五月
分十一月より、坐して湯浴とたまう。加熱とあく
下山月三里、後骨より、七壯夷して毒氣と燐毛。
脛より、辛く肺氣熱ひ。乃病氣と、毒氣と燐毛。
不夜城の書、尼泊人、詔をとて、年月日附ア
附て、夢矣の日、あいと、至阿難僧、多よ古芳明學
ハ、之もぞらす。後世、神者、之をハ、位もとて、題
すた。四事の事と云ハ、左の如き、之をハ、傳
あり。狀も、左元綱より、多ハ、肺にあり。と、之を主事
附り。之によからず。又、藏秀、夏侯英より、記す
又は、月毎、既と核ぐと、二百枚稿と、それへ、墨糞と
申。而初く、手と、筆の如き、切ふ。夫の手と、こそ
月令度義、よかゝる。

天寒和暖の时节、外ウ師、又過歎して、血氣、一
輸也。

朱子乃後修よりと、因縁より、仲嘉、金匱要事と、より文
獻總代娘氏の街より、洛陽立、以廢婚終、順天時也。
至ハ、七月より、舅女嫁娶の礼を終く。宣二月、即
以月逝と食へ大に、益病と、千室方へ、入らず、免へ食
ハ、緑と、傷、雜五と、今ハ、とやづ、英を、葉采及深蘿と

トハ痼疾と爲り藥を食ひ少くれ大蒜と
大人をして氣あせりしむ小蒜とて人へ
志性とやゆりが生冷と食ひとど又陽燧の邊
を燃へとぎり瘧癥と爲り月全瘧氣毒者
蓄書

一月八日候才一桃核並才二金庚候才三卯化為
桃太極子體乃ニ候あり才四寅子爲之也才已巳
數才才六始電太春之ニ候あり

夢齋ハ晝四十七刻五十夜半十二刻十分春分
辰巳刻夜五半刻

冬令度義

一日休治文議と書す

二日今日と重三と云又と記す上へ初と云う也

つづくも三月初乃巳の日と云ふ上也す。肩摩
辰戌月十九日巳と深日とす不祥を深く云う
御宿の宋書より後三百と用く己亥日
朔ノ辰戌と云ひゆく今日文治と爲り桃核酒と
乃ミ文治と號應よと云ふ

今日文治と云ふと考へ前此宋時代

三月蠶月常と傳仰云中と競也と云。三月の天冬季焉而月
に多く風氣りるよりて草木生長する
よりやかに月と云と異なり

三月二日用麴の汁とねごく密く合ひ粉を打す
名前て鶴舌粉（青松米）とよされと食とせば麻糬
氣（き）とちろせう又かくまよ鳳麴酒中の誠實庵壁
時（とき）不_レ去（ゆく）麴味雜米粉合之甜美ありとてくこれにて
乃至ハより一ノより鳳麴酒と用りとこそあり又
文使家深牙一束よ圓やくまほり候よ西京を
名づく二月よ始く生ひ茎葉細小して葉緑一月
二日よ婦女それとなく茎一株もつて候とすは
えきく葉子すみだりありあれば我國そぞく六
風麴酒と用ひてさてうちつゝ口皆より鳳麴と
用ひまじて丈と用ひ事へ一束や又絵畫豆籠等
みづから用ひ出立（だい）日時或人草餅をほりつて齋
王よすか書立（しゆりつ）の裏たるふと尋て二丸
餅取めあり齋廊（さいろう）下狀（じょう）とも周ひせたコ治（じ）通
考辛と呼べと云ひ清人云事とお傳へく二月
二月よ草餅をゆく粗糲（そくら）にともも主解のかつる
事と云ひてまたもん志草と申す後にはちむ
住ちうにゆき秀英御紀の後と云ふと申す一社當

とのむ重月金度義よ法事生をとりてひそく三月桃
花とおもへゆひてこれとのめの病と除て能く
をうりかひとあん桃糰と酒と浸さひひとあらむと
用へてお食へれと服まれ真誠りてやまほと
車をよみてえり

○毛河と云ふ僧師は考納先祖の作とて筆によ内食
と毛もむろ徳あり出國の人へかれしすけよへちあむ
毛り候節ふへえりた御上已縁半星夕中元を齋室
ノ難たりこれ世俗の斎する時行てとのくうせむお
附會毛と云ふ僧一寔累はもうるな考納先祖とすめ
さぶひゆよこうひよくひ又豈だよ車う事せず車う
くあくく車に車うとおよ車うとくもうひき見ん
や朝和とひも角代果蔬菜その身也時食とひ上巳の
草履湯年乃様中元乃蓮を飯を湯の菊酒野子
飯の都うと毛と蟹よよりて益水に酒つて三月
初玉御薦とどくひり被れ

○山ゆへひ今日曲水の宴をすい毛川へりとよ道邊
一被襷毛と流水の鱗とうぐうれ松の蟲と毛と
あじによ崎と能くまくその松と毛酒とくわく松
とふ木とくの鱗と毛すをどうすまくちうべ

續齊書記よつゝ晋乃武帝尚書執事虞よ阿
とくこの曲水を義竹とり拂や撃虞罪を之
漢代高帝乃時平京氏徐肇二月初と之
乃女と之二日よりて二月三十小石一束
のんじく怪とてこれと多激と様と盟溢
一遂よ流水よ事とうべてこれとのじめに安
きの起と帝のそひ故のとくちへ往軍
にそりす高書郎東晉二月とナシく劉虞
少と少子これとあしやび一月云トモく海
色とく一湖みに周く巻とうふかの逸游よ
羽觴酒波又秦代昭王二月上已宴酒の如全人
てあ面お出ぬん羽と核くらむく全玉制有西
及秦乃霸侯侯因立曲水一蓋後漢云々
おほく之れ蓋事と帝乃はく善全みすかと
東晉よ附し核を屋と左邊もく陽城乃全ミサリ
とあげ仰り一月後漢書禮儀志云二月二日既
立禊禊于洛濱水上と行と之濱汎浦とてよこけり
りノ郭虞と嬉とあくびて之れ鄭乃國の儀

二月上己ノ日、敵とあらに宿く不祥と祓除を爲す
乃經代郵局より多々書類を以て來不活する。後修

給れども其事へ一トも車ノ如ク

勾萌表達陽氣敷地握芳蘭臨清川乘

美酒文梓善食

三月夏候之酒食出干野曰禊禊吉儀也

然、頃ゆく尊水ノ宴とし、車

御事家參入

御事より始りりと沙翁を參

國事も甚

ノ家の行風をりと人をば絶えだす

總事會編日本三月三日有桃乞酒水宴と書

雅後更ニよ定憲は妻ノ哥ア

先づりよもや歎しこもうち名より

あり紙おさつて又と多事を今一之をあひ

カ前ゆのあゝ紙はあづけつきてなまに

タリと身を以て

○又今月詔令とあづけり其後四月上旬とまつて

乃車ノ日明早ノ申門にたまひとて御と勅

之にかくなく後よつまゆる

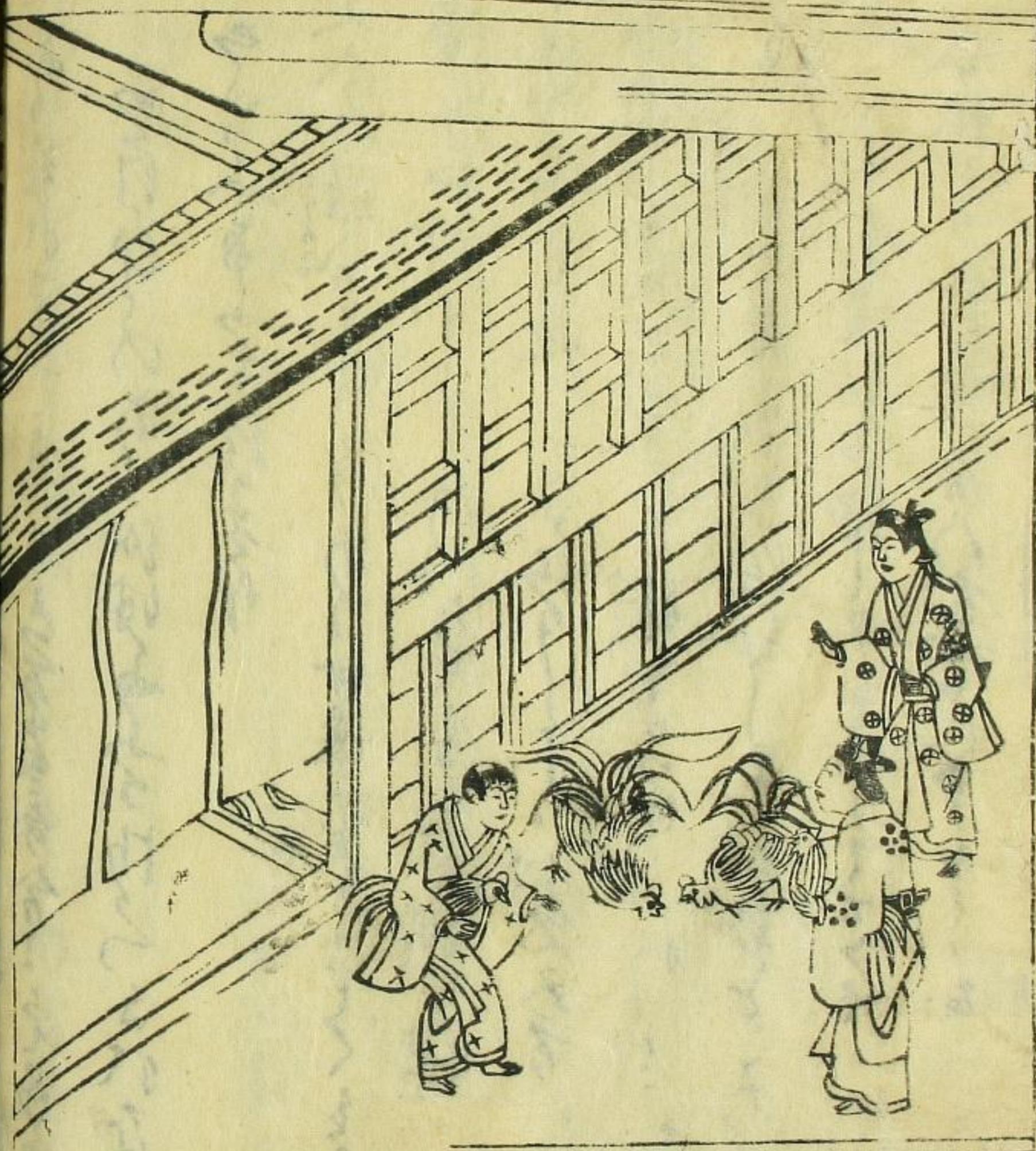
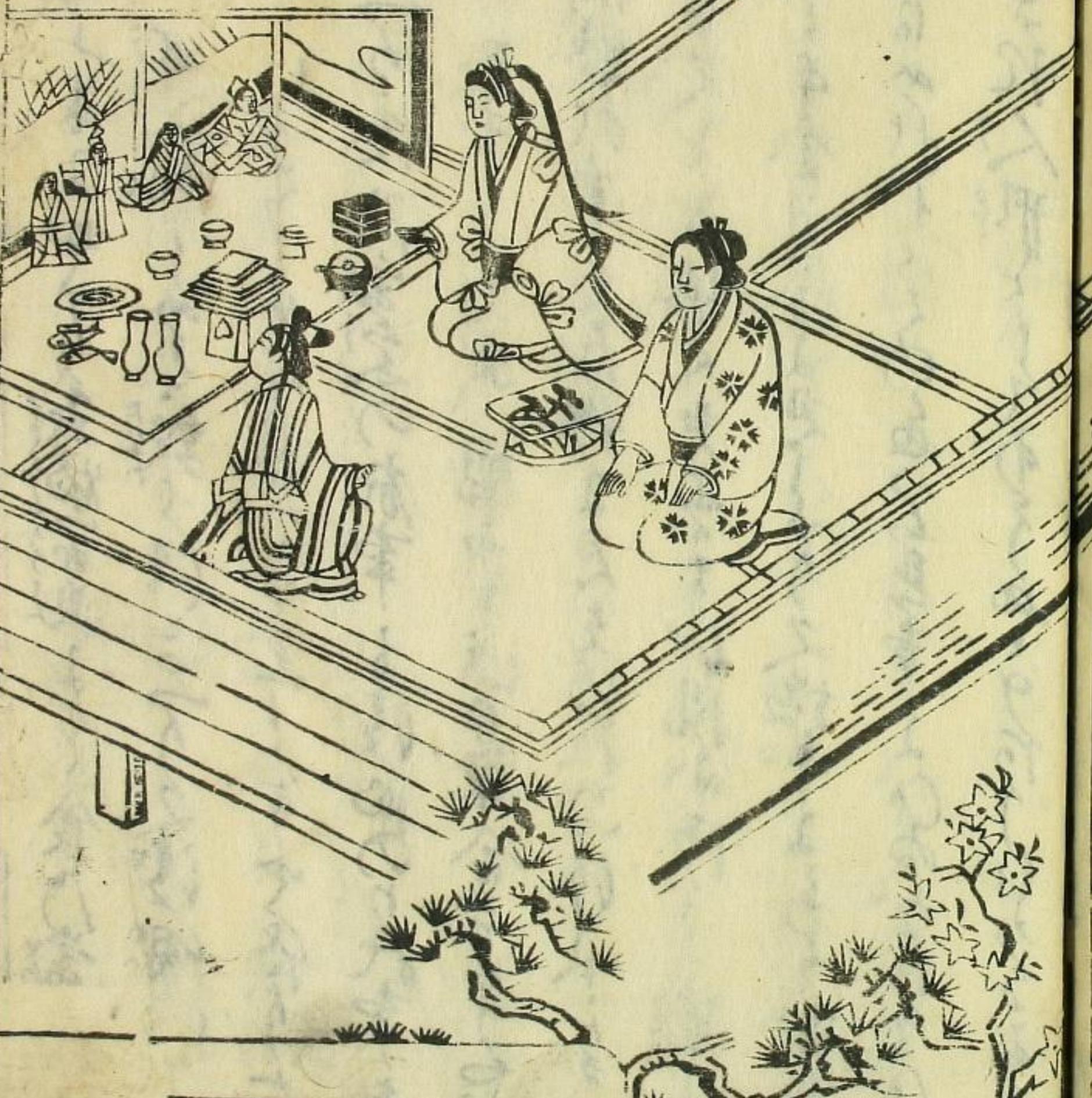
御宿場へ立てとすと御とつせられ

御宿場へ立てとすと御とつせられ

御宿場へ立てとすと御とつせられ

一ト一ト車速船を御とつまゆるのとてヨヘナ

今度もくにれ唐ノ事御事ナシ、車城又老



てひよ書よをすり玉器玉典よを食ひ常御平
各詠と聞一也と樂じてひよアラス達明めりに詔
ことたくそへきてよりゆきとすもなりちよ
とくだ乃翁のが車も清のり代車ナリ
かをまつて我國をばは難合さるゝをも
關稅代車を左波よ尺え給ひけり下りま
○ば日艾とが被くタよもづけ風ふけし事に用て
○千金刀金刀金よアリ又端半身を下す
○今おれわくのぬり事ひゆきらをひて
しりまた人形とりわざくわざうむかうびの
事も原代物をとて仰げれハ萬一トヨミ
トヨモウス原代十ニトモアシハいかれ
ひハシモトモのととありて十ニトモアシト、シモ
キナカニス遠よきもあくに人形ふ衣冠とめ
てニモ常もとさせることとりてあるをみわ
駿河よかてとあまくへじゆうのと
ササギトモトモササギあまくハニキヨテレと舟のとく行方
晦日落源今月と二月共とツヨリテ真ハ湯舟の内
にて天宇融りすす木舟をも車を同人の
血氣を和暢とりどもんばたを黄遊してやく

今秋之とテシムトニシテ喜び波ノ日すとて郊外
かわくひふあ小雪降りて静かと美一春と
而後桜季元河内那恆^{アキラハシ}奇

これてヨシロヒト不だに喜びと見ゆ
タニキシテシテ西風甚に高先にと太陽
天あつゝんスあ大細云ひ差の秀
タクテ波えまにとさるあすきよのアヒ
キハツケモル

賈島^{カジマ}三四月日賄割評^{カイハツ}詩

三月正月三十日國忌祭^{カミツキ}若^{カミ}今^{カミ}夜不
須膳^{スシヤ}殊^{シカニ}曉^{アサヒ}是春

清明^{ミツメイ}より二日前よりと家食^{カミシム}い日とく^クトハ祭
先^{エビス}お墓^{ハシマ}と掃除^{ハシラフ}してとちりの竹^{チク}と
これいこう^{シラカシ}の風俗^{カタチ}と、^{シラカシ}と^{シラカシ}と^{シラカシ}を
食^シと十月明日展墓^{ハシラフ}可^シある事本初^{ハシラフ}初死^{ハシラフ}も^シハ
左^{シラカシ}と^{シラカシ}人^{ハシラフ}日^{ハシラフ}終^{ハシラフ}墓^{ハシマ}よりて施塚^{ハシラフ}
一^{シラカシ}事^{ハシラフ}

四月親戚及支友と食す^{ハシラフ}元宵^{ハシラフ}と食^シと幸^{ハシラフ}か^シ禮
て^{シラカシ}一^{シラカシ}豊納^{ハシラフ}可^シに^{シラカシ}人^{ハシラフ}三^{ハシラフ}五^{ハシラフ}

害とも無一物を失ひ又落葉にて
秋風に反面の母依親威男女と寢じて不覺た
と極く深遠を拂ひしに懷て過ぐ御室とすう
長子ゑひ巳ノ候もたゞぐうすうへ平お舞
従事樂をとくが可なり

二月天氣久晴一あま風毛と雪を吹破後
と修造一或事起と薄改板屋と修葺

三月落葉落葉の落葉と四處曆日記一

初又ハ中更度ようえアドリヤマレハ何トソリ而
キル蜀黍玉蜀黍芋甘芋羊豇豆蔓薹豆莢至麻
豆志豆刀豆胡麻薑眉冠豆黍石竹地芝草麻子
荊芥香薷方どば月乃青の下をうとく
紅豆之三月のやより初く種トトテス月の豆ま
きくかくかきはうれえのうのう一地芝渥テクセ
トトモタタケハモトモタヌのうのう一地芝渥テクセ
トモタタケハモトモタヌのうのう一地芝渥テクセ
トモタタケハモトモタヌのうのう一地芝渥テクセ
トモタタケハモトモタヌのうのう一地芝渥テクセ

清明ノあ後ニ接テトヨ月令度義ニ及ドリ

コウナニ歳とえレヒテ厥とシテ日ナ一ミハム

カハテ厥と接モテス日ニボ取玉ヘ食ム

湯シテテアサ用の或シキ薑と用の毛豆等

新書の後モアマヅラヒテ垂ヘテ垣藪ハ乾筋

マヌケリムシとナシハ垣藪ハ甲ヤモリ千歳

野くもと俗よ用ヒテ又蕨と狗脊と垣藪

元死の有リモハチニテアサ用七ヤヌ日と顯ヒトシテア

歎好、書ニ及テシテ今世教部乃ヒヒアラ橋ノ左

豪ホ後ト十日とテア壁ハ御手す吉野、ヒテ

左多モミツメノ後ト千ヌ日と以テ祀候ム年

乃起殿ノよりシトニ下ヒリムモニテ一連連

シテアタガシハ良事邪ハハモ模ヒムシテ

稀ニ十日あリナク

ノリ被候スムトシテ一月半一旬ニ而或一月

代和事ハ獨ハ活中ナリヤカシく拂引シテ壁

モ仁和ちハ仰くもかうにテ

此月小蒜及狼毒

車大黄ヒ生薑獐麻肉と合フシトシテ涼道トシテ

瘡毒敷病と聲ニ並トシテハ根ト聲ス

未盡

豫あらへつゝくと殺さるかくして天道小僧（ハムヒ）と
あく事命と近いし石莧の花見菜を食ひすが、且
魚鼈と食ふ化せされず宿疾を癒す

二月八日候才一相始（アラタニキ）兼才二回鼠化為冤才二五始
見古漢河の三候あり半に萍始生未又拂拂拂
駿馬才六載勝降于桑右敷面八候ナト、
清明八月五十二刻十分夜は十七刻又十分穀雨と
至五十四刻十九夜半十五刻五十分月全慶長

早稻田大学図書館

011888001613